

平成 28 年度 第 1 回グローバル教育推進委員会議事録

開催日時 平成 28 年 7 月 4 日 (月) 9 時 30 分から 11 時 50 分

開催場所 高知共済会館 3 階 会議室「藤」

出席者

1. グローバル教育推進委員会委員 (敬称略・五十音順)

石筒 覚	高知大学地域協働学部准教授
葛城 崇	楽天株式会社グローバル人事部副部長
坪谷 ニュウエル 郁子	国際バカロレア機構アジア太平洋地区委員
長崎 政浩	高知工科大学教授
藤中 雄輔	高知県教育委員会事務局教育次長 (座長)
山本 ベバリー アン	大阪大学人間科学研究科教授

(江原 美明 神奈川県立国際言語文化アカデミア教授 欠席)

2. オブザーバー

高知南中学校・高等学校 校長	谷岡 博志
〃 副校長	廣瀬 法民
高知西高等学校 副校長	谷 富貴
〃 教頭	市原 庸寛
〃 教頭	宅明 健太 (IB 教育推進チーム)
〃 教諭	井上 祐子 (IB 教育推進チーム)
〃 教諭	竹崎 仁

3. 事務局

高知県教育センター 所長	上岡 美保
〃 部長	岡本 美和
〃 チーフ	別役 千世
〃 指導主事	檜尾 文雄・上田 妙・竹本 佳奈 南 智恵・小松 博
小中学校課 チーフ	益永 美佳
〃 指導主事	伊芸 美紀・中屋 和佳
高等学校課 課長	高岸 憲二
〃 企画監	坂本 寿一
〃 課長補佐	高野 和幸
〃 チーフ	松井 竜太 (司会)
〃 主査	久保 義博
〃 指導主事	野中 昭良・清水 宏志・前野 佐希子

協議事項

テーマ：主体的な学びや協働的な学びをとおした学習の在り方について

1. 開会

(司会)

失礼します。皆様、おはようございます。

(各委員)

おはようございます。

(司会)

少し時間が早いですけれども、皆さんお揃いになりましたので、始めさせていただきたいと思います。ただ今から「平成 28 年度第 1 回グローバル教育推進委員会」を開催いたします。

私は、本日の進行役を務めます、高知県教育委員会事務局、高等学校課 再編振興室チーフの松井竜太でございます。どうぞよろしく願いいたします。

まず、開会にあたりまして、高知県教育長、田村壮児がご挨拶いたします。

(教育長)

教育長の田村でございます。

本日は、本年度の第 1 回目になります、グローバル教育推進委員会ということで開催させていただきましたところ、委員の皆様方には大変ご多用の中、また、山本委員、坪谷委員、葛城委員におかれましては、大変遠路の中ご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

この推進委員会の趣旨につきましては、皆様も既にご承知のとおりでございますけれども、年度初めということで、改めて私の方からお話をさせていただきたいと思います。

平成 33 年に、今の高知南中・高等学校と高知西高等学校が統合いたしまして、新しい中高一貫教育校がスタートいたします。

その際に、それをきっかけにいたしまして、本県でも外国の方々と交流をし、協働して新しい価値を見出していけるような、そういった人材の育成を目的として、国際バカロレアの教育を取り入れていきたいということで、今、構想をしているところでございます。

そのためにも、まずは、それぞれの統合をする高知南中・高等学校、高知西高等学校において、探究的な学習でありますとか、あるいは、英語教育についてより充実した取組をし、新しい中高一貫教育校を、国際バカロレア教育にスムーズに移行ができるようにということで、準備を進めていきたいということです。

それについての様々なご指導、アドバイス、ご支援をいただきたいということで、この会をやらせていただいているということでございます。

これまで、それぞれの学校で、高知南中・高等学校におきましては、知識構成型ジクソー法を取り入れました、探究的な学習ということをやってきておりますし、それから、高知西高等学校においては、スーパーグローバルハイスクールの指定を受けまして、食をテーマとした探究的な学習、あるいは英語教育の充実というようなことに取り組んできているところでございます。

その取組については、昨年度も実際に授業等をご覧いただいて、一定の評価もいただいたところではございますけれども、国際バカロレアをスタートするという、その目標を考えますと、まだまだ道半ばまでとても行かずに、一步を踏み出したばかりというところかなというふうに思っております。

そういった状況でございますけれども、皆様方、多分ご協力いただいているのは、高知のような田舎の公立学校で、この国際バカロレアといったことにチャレンジをしようというところを、ぜひ応援してやろうというようなお気持ちで、委員をお引き受けいただいているのではないかとこのように思っております、その皆様方のお心を我々としても受け止め、しっかりと取り組んでまいりたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

それから、最後に、教育委員会側の体制が少し変わりましたので、お話をさせていただきます。

今、座長で座っておりますのが、昨年まで、高等学校課長でございました藤中でございますけれども、前次長、中山さんが定年退職ということで退職をされまして、後を藤中次長が継いだという形になっております。

その藤中次長の後は、県立高校の校長から高岸が参っておるということでございます。

また、この7月1日に、特に国際バカロレアのスタートに向けて、体制を充実させたいということで、高知西高等学校に教頭として宅明（たくみょう）さんに来ていただいております。

宅明さんは、国際バカロレアについては、幅広い知見を持っておられるというふう聞いておりますので、これからの取組に、大いに力になっていただけるのではないかなど、期待をしているところでございます。

そういったことで、今年度また、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

以上で、ご挨拶とさせていただきます。

（司会）

どうもありがとうございました。

なお、田村教育長は、所要のためここで退席させていただきます。

＜ 田村教育長 退席 ＞

（司会）

それでは、本日、外部より5名の委員の皆様にご出席いただいております。ご出席の委員の皆様を紹介させていただきます。

高知大学地域協働学部 准教授、石筒覚委員。

（石筒委員）

石筒です。よろしくお願ひいたします。

（司会）

楽天株式会社グローバル人事部 副部長、葛城崇委員。

（葛城委員）

葛城です。よろしくお願ひいたします。

（司会）

国際バカロレア機構 アジア太平洋地区委員、坪谷 ニュウエル 郁子委員。

(坪谷委員)

坪谷でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

(司会)

高知工科大学 教授、長崎政浩委員。

(長崎委員)

おはようございます。よろしくお願いいたします。

(司会)

大阪大学人間科学研究科 教授、山本 ベバリー アン委員。

(山本委員)

おはようございます。よろしくお願いいたします。

(司会)

また、高知県教育委員会事務局からは、藤中雄輔が出席しております。

(藤中委員)

皆さん、おはようございます。藤中でございます。よろしくお願いいたします。

(司会)

委員の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、江原美明委員は、所用のためご欠席とのご連絡を頂戴しておりますので、申し添えます。

続きまして、資料の確認をさせていただきます。

皆様、お手元に配付させていただいております資料、まず次第、それから設置要綱、それから平成 28 年度のテーマとスケジュール等を記載したものが 1 枚ございます。

それから、資料 1 から 5 までございます。

なお、委員の皆様には、「探究型学習事例集」というもの、冊子になったものを配付させていただいております。

資料は、よろしいでしょうか。

それでは次に、設置要綱をご覧ください。本グローバル教育推進委員会は、教育次長を座長とすることとしておりますので、藤中委員に座長をお願いし、ここからの進行は、座長をお願いしたいと思います。藤中委員、どうぞよろしくお願いいたします。

(藤中座長)

先ほど教育長の方からもお話がありましたけれども、一昨年、昨年と、中山前次長が座長ということでこの会を運営していましたが、私はそちら側の方において、色々と対応をした立場から、座長ということで、また今年一年間よろしくお願いいたします。

それでは、お手元の次第に準じまして、会を進めさせていただきたいと思いますので、2 時間という短い時間ではございますが、ご協力のほどをよろしくお願いいたします。

まず、2 の「協議事項」のところでございますけれども、1 枚めくっていただきまして、平成 28 年グローバル教育推進委員会のテーマ、あるいは今後のスケジュール、それから裏

面には、昨年度の4回の推進委員会のご意見等をまとめたペーパーをお開きいただければと思います。

本年、本会につきましては3年目になります。そういった意味で、実質、昨年度が本格的にグローバル教育を各校において推進をし始めた、高知南高校においては協調学習、あるいは英語教育プログラム、そして高知西高校におきましては、SGH という形でございます。

そういった中で、グローバル教育を進めていくにあたってのテーマを、もう一度確認をさせていただいて、それについてまた、各委員の皆様方から、今後の報告に基づいて協議をしていただければということで、資料を作らせていただいております。

テーマとしては、主体的な学びや協働的な学びをとおしての学習の在り方についてということで、これは今取り組んでおるグローバル教育の、一番中心になる内容ではないかと思っております。

そういった中で、一昨年からずっと、各委員さんの方から、それぞれの子どもたちが、あるいは先生方が、学習の振り返りをする、そしてその後に、自分たちがそれを活用できる、そういった力を付けていくための「振り返り」というのが、一番大事になってくるのではないかというご意見が多く出されております。

今回、テーマをこういった形で、なお一度確認をさせていただいて、そして、今年は年3回のスケジュールで、予定としては、今日の1回目、そして10月か12月に2回目、そして2月の月上旬に3回目と、計3回の推進会議を開催させていただきたいと、考えているところでございます。

本日につきましては、昨年度の取組を踏まえた本年度の計画について、また、本年度の達成目標等の確認、それに対するご意見等、ご協議をお願いできればと思っております。

では、本日については、次第にもありますように、それぞれ高知南中・高等学校の英語教育と探究型学習。そして、高知西高校のSGHの三つの取組が、このグローバル教育推進委員会の協議内容と位置付けて進めていきたいというところでございます。

また、下の方に、達成目標としまして、学習の振り返りをし、学習者の習得状況を教員および学習者にフィードバックする。そういったことをとおして、自分で課題を発見する力・解決する力、そしてそれを基に考えていく力、そういったものを身に付けることができる子どもたちを育てていく、そういった達成目標を示させていただいております。

裏面には、昨年度4回、本会を実施させていただいた中で、各委員の皆様方から、ご意見としていただいた部分をまとめさせていただいております。

1回目では、特に大事なものは、こういった取組を教科だけではなくて、教科間の繋がりとといったものをしっかり持たせるということ。

また、2回目では、英語教育プログラムを進めるにあたって、英語嫌いの子どもたちに、興味ある分野から進めていくといったことなど、いかにしてプログラムに関わりやすくしていくのかということ。

そして、3回目は、校内発表会がそれぞれありましたので、そういったことも含めて、学習の狙いを明確にし、そして内省まで踏み込んだ学習プランを作成すること。

また、子どもたちが、活動をアクティブにさせるだけで終わらない、まさに、やったということだけが残るのではなく、やったことによって何を子どもたちが変えていったかと、いったところに繋げていくということが大事だといったご意見。

そして、4回目には、可視化して学べる、学習へのモチベーションに繋げるポートフォリオの活用とか、そういったところも、さらに充実させていかなければならないのではな

いかと思います。

特に、他教科との繋がりをしっかりと進めていくといったようなご意見を、計4回の会においては、お話をいただいたというふうに受け止めております。

こういった、4回のご意見を踏まえまして、この後、協議をするテーマにつきまして、各校の方から本年度の計画、あるいは昨年度の反省点といったものが出されるということになるかと思っておりますので、よろしく願いいたします。

まずは、このテーマ等についてまとめさせていただきましたが、これから協議するにあたって、こういったところもしっかりみんなで共有した方がいいと、というようなところがございましたら、またご意見をいただければと思っておりますが、どうでしょうか。

こういった方向で進めさせていただいて、かまいませんでしょうか。

〈 異議なし 〉

はい、それでは、今年度は、このテーマを基にそれぞれの学校で取り組みをし、そして、この推進委員会の方でご意見をいただきながら、さらに改善をしていくということで進めさせていただきたいと思っております。

それでは、次第に従いまして、委員会を進めさせていただきます。

それでは、協議内容の(1)高知南中・高等学校における取組、①のグローバル教育プログラムの本年度の計画と取組について、教育センターの方からご説明をよろしく願いいたします。

2. 協議事項

(1) 高知南中・高等学校における取組

①グローバル教育プログラム（英語教育）の本年度の計画と取組について

(教育センター)

それでは、英語教育プログラムについて、まず説明をいたします。

英語教育プログラムでは、研究主題を中学校では、主体的に考え、積極的にコミュニケーションを図る生徒、高等学校では、自国の文化を理解し、国際的な視点で物事を考え、積極的にコミュニケーションを図る生徒を育成することを目指して取り組んでおります。

その生徒像を目指し、昨年度から中・高の接続を意識した、「6年間のシラバス」を設定して実践をしています。

また、学習到達目標であります、「英語で～できる」という形での「CAN-DO リスト」を作成し、英語の授業で身に付けるべき力を明確にしたうえで、その力を付けるための言語活動を位置付けるようにしました。

このような昨年度の授業実践をとおして、自分で考えたことを英語を使って伝えようとする、生徒の姿が増え始めてきています。

昨年度の取組の課題としまして、CAN-DO リストの形での学習到達目標を作成したのですが、それに基づいた指導と評価について、教員間の共通理解が十分図れていなかったこと。

また、その到達目標に基づく、単元や授業の目標について、生徒と共有はしてきたのですが、単元を見通して計画的に指導していくことや、その目標に到達したかどうかを評価する、評価方法には課題がありました。

そこで、このような課題を受けまして、平成28年度は、英語の授業をとおして付けたい力をCAN-DO リストに示し、その力を生徒に実現するためにも、英語の4技能を統合した指

導を充実させていくこと。

また、その指導を評価することで、次の指導に生かす、指導と評価の一体化を図るためにも、妥当性のある評価により、適切に生徒の学習状況を把握する必要があると考え、本年度は、その評価の部分に着目をしました。

本年度の取組について説明をいたします。

本年度は2年目の研究ですので、中学校では、互いの考えや気持ちを伝えあう力、高等学校では、情報や考えなどを的確に理解したり、適切に伝えたりする力を育成することを、授業改善の視点としています。

本年度は、6年間の系統性を考慮した指導を行うことができるように、6年間のシラバスと、学習到達目標である CAN-DO リストとを関連付けて見直しを行い、CAN-DO リストを実現するような授業を組み立てていきます。

具体的には、生徒が英語を使ってできるようになることを明確に示し、指導する教員はもちろんのこと、生徒もその到達目標を実感できるように、生徒と目標を共有していく。

また、生徒が自分の英語力がどれだけ身に付いたのかを、可視化できるような手立てを工夫していきたいと考えています。

その可視化できる一つの方法として、修得した知識を活用し、英語で表現する力や理解する力を図るテストとして、パフォーマンステスト、そして、指導途中での自己評価や相互評価を活用していきたいと考えています。

それでは、本年度4月から8月までの取組について、説明いたします。

まず1点目、「CAN-DO リストの活用について」です。昨年度は、中学1年生を研究対象として、授業実践を主に行いましたので、今年度は中学2年生を対象に研究を進めてまいります。今年度、使用する教科書に併せて、中学2年生の単元ごとに学習内容と照らし合わせて、英語で何ができるようになるかを示しました。

これらを基に、6月初旬の教科会では、1学期中間テストまでに行った指導と期末テストまでに行う指導を確認し、指導の結果、生徒が目標に到達できたのかどうかを教科会で確認しました。

中間テストまでの指導については、教員の見取りやパフォーマンステストで評価したところ、概ね満足である、B評価以上がほとんどということでした。

生徒の様子からも、英語を話すことに抵抗もなくなり、話す力も聞く力も身に付いてきている。そして、自分で考えて表現することができてきています。

しかし、教科会の中では、評価の規準が主観的になりがちで、教員により差が見られるということも課題として挙げられました。

そのため、英語での到達目標をより具体的に設定し、その趣旨を教員間で共通理解して指導できるようにするため、単元の言語活動と評価規準について、さらに教科会で検討していきたいと考えています。

次に、2点目、「評価の改善について」です。

生徒の英語の表現力を客観的に把握することができるように、生徒の話すことや書くことの評価として、パフォーマンステストの検討を行いました。

パフォーマンステストには、生徒が自己の学びを客観視できるように、テスト前の指導段階で、生徒の自己評価や相互評価を取り入れました。

自分がどれだけできるようになったのか、どこができていないのかを、生徒自身が把握すること。また、相互評価ができるためには、評価の観点を理解して判断するということが必要になってきますので、生徒自身が英語力をさらに振り返ること。

そして、次の学習への意欲や、同じ目標に向かって学んでいくことに繋がっていくので

はないかと考えています。

また、学期ごとに行う筆記テストについても、従来のテストでは、知識・理解の確認に偏りがちな内容が多かったということで、生徒の英語力が知識・理解の段階でとどまり、活用し表現していくというところまで確認することが難しいこともありました。

そのため、中高の教員が筆記テストを持ち寄って、授業で取り組んだ、英語で表現する力を見取ることのできるテスト内容についても、検討する場を設定していきたいと考えています。

次に、取組の3点目ですけれども、「学習意欲を高める指導の工夫について」になります。

英語学習への意識・実態調査を昨年度、実施をしましたが、英語の授業が楽しいとする割合は、中学校や高等学校では1年生が高く、2～3年生では低いという傾向が見られました。

これは、その学年の持っている特質のようなものもあるかと思うのですが、やはり、英語を学ぶ楽しさを実感し、英語で表現することを主体的に取り組もうとする生徒を育てていくことは、大事であると考えます。

そのためにも、授業の目標を生徒に提示して共有し、言語活動をとおして授業内容の理解を深め、目標に対する振り返りをしっかりと行うことで、学習意欲や授業内容の理解度を向上させていきたいと考えています。

また、英語の学習が授業の時間だけで終わってしまうのではなく、英語に触れる時間を増やすという観点からも、授業の言語活動と家庭学習をリンクさせながら、授業内容の定着を図っていきたいと考えています。

取組については以上です。協議事項としまして、昨年度の英語学習での意識・実態把握調査の結果からは、単語を覚えることが難しいことや、英語を書くことが、英語学習のつまずきとして挙げられておりました。

このような生徒の実態を踏まえ、授業内容の理解、1時間の目標、つまりは技能が身に付いているかどうかを、教員が評価するだけではなくて、生徒の自己評価や相互評価を取り入れて、生徒自身が英語力を振り返るということを検討しています。

生徒が自分の英語力を振り返ることで、学習への動機づけにも繋がるのではないかと考えていますので、その評価の工夫について、例えば、生徒が評価する視点をどのように持たせるのか、また、生徒の自己評価や相互評価に対する、教員からの評価を生徒にフィードバックする時の留意点などについて、授業者があらかじめ心得ておくべきことなどを、ご協議いただけるとありがたいと思っております。

説明は以上です。ありがとうございました。

(座長)

ありがとうございました。

まず、一つ目の協議内容としまして、グローバル教育プログラムの英語教育、高知南中・高等学校において取り組まれている、英語教育の本年度の計画及び取組について、ご説明いただきました。

それでは、ただ今の説明に対してご意見・ご質問等、よろしく願いいたします。

ないようでしたら、私の方から少し、ご質問をさせていただきたいと思います。

昨年度、中学校1年生を中心に実施したというようなお話がありましたけれども、ちょうど2年生の4月には到達度テストというものを、生徒さんはやられているのではないかと思います。

あるいは、高校1年生でも、「進路マップ」等の知識・技能を見る部分がございますけれ

ども、定着度がどれくらいかといったチェックを入れていると思いますが、そこから、どういった課題が見えてきたのか。あるいは、中学校 1 年生に 1 年間やってきた内容が、2 年生の 4 月の段階でどういう形で定着している、また、問題・課題といったものはどんなところがあるか、その辺について少し、現場の方からお話をいただけますでしょうか。

(高知南中・高等学校)

現在、高校は年 2 回の「スタディーサポート」ということで、高 1 生は 3 月の合格者登校日にやっています、あとは、2 年生 3 年生は 4 月、それから、2 回目は 9 月ということになっています。

いわゆる、業者の中で、GTZ (学習到達ゾーン) という分析をされていくのですが、本校では高校 1 年生の段階で、1 回目については、いわゆる義務教育段階の学習の定着度が欠ける層を D ゾーンといいますけど、その中で、D3 層というのが非常に多いということになります。

これは、中学校からそのまま内進生という形で高校へ進むという子たち、それから、高校入試で入ってくる子たちも含めて、D3 ゾーンが多くなるという例年の傾向で、2 回目の 9 月には、それが改善をされていくと。特に内進生の方が、改善の状況は顕著であるということでもあります。

一方、中学校の方は、中学校 2 年生の段階で学力推移調査というのを、4 月に入れています。

その中で、英語を見てみますと、やはり、問題自体も全国の中高一貫教育校が受けるレベル、私学も含めて、そういうレベルなんですけれども、かなり下位層にいつているということが顕著です。

国語を除いて、数学・英語、3 教科なんですけれども、山が左側にあるということになっています。

そういうところで、今年の中 2 生の状況も見ましたけれども、1 年間をとおして英語に興味を持つということで、昨年度取り組んでいただきましたけれども、やはり、知識・理解の面で定着度が弱いということでもありますので、これは英語科に投げかけて、この課題の分析を依頼して、対応といいますか、どういう授業を組み立てていくかということも協議をしています。

高校では、こういうベネッセのテスト、それから中学校段階では、同じく学力推移調査、それから中 3 生は、直接英語という教科はないんですけども、全国学力テスト、あるいは高知県版の学力テスト等々がありますので、それをその時々で分析をして、中高の教員でしっかり共有をして、対応をしていくようにというような指示もして、取り組んでいるところです。

現時点では、知識・理解の定着度合いについて、まだまだ課題があるというふうに把握をしております。以上です。

(座長)

はい、ありがとうございました。

学校の方から、現状 1 年間、こういったプログラムをやった中での、状況分析について、ご説明をいただきました。

(委員)

資料2 ページ目の(2) 具体的事例の実践のところ、最後に、「CAN-DO リストを基にした達成状況について確認した」とあります。どんな状況で、何が達成されていて何ができてなかったかというのを、具体的に教えていただけたらと思います。

達成したとなれば、どんなになっているかというのを示していただければ、議論のスタートが切れるかなと思います。

(教育センター)

現中学校2年生の「1学期中間までの指導」として、パフォーマンステストについては、話すことの一つ目の「春休みの思い出」について、暗記してスピーチをするという活動を行いました。

暗記をして、相手に分かりやすく伝えるというものでしたが、評価規準に照らし合わせて判断すると、評価が努力を要する「C」の生徒はほとんどいませんでしたが、十分満足できる「A」が、あるクラスは85%程度、あるクラスは50%の生徒だったという報告を受けています。

ジェスチャーをしながら、自分が春休みにしたことを生き生きと伝えるというのを行いましたが、ここは指導の際に工夫できるのではないかと思うのですが、最初に発表した生徒が、自分の考えを生き生きと元気に伝えることができたクラスでは、その生徒にならって後の生徒もできたということでしたが、最初の生徒が割と静か目にスピーチをしたクラスでは、全体を通してそういう傾向になってしまったという報告を受けました。

それから、書くことでは、動詞の過去形を活用して、春休みの思い出とゴールデンウィークの思い出について、実際の体験を書くパフォーマンステストについては、全員概ね満足できる「B」以上だったという報告を受けています。

「1学期中間から期末までの指導」では、話すことの学習として、「入国審査の場面で、オフィサー役のALTとJTEとやり取りをする。関連質問を2つ入れて、即興で答える」ということにつきましては、私も実際に見せていただきましたが、どの生徒もすごく意欲的に取り組んでおりました。入国審査の中で先生方が、即興的な質問をした時にも、単語で答える生徒もおりましたが、今まで習っている文法を使って答えることができていたり、質問に対する答えだけでなく、新たな情報を加えている生徒も大変多くおり、自分の考えを英語で伝えたいという気持ちをしっかり持っていると感じました。

先生方もそのことをとても評価をされていました。即興で話すことを、今年度は入れていくようにしていますので、段階的にそういうパフォーマンステスト、それから、普段の帯活動での即興に今、取り組んでいるところです。以上です。

(委員)

かまわない範囲でここに示していただけたら、議論のスタートラインになるかなと思いますので、ぜひよろしくをお願いします。

(教育センター)

はい。

(委員)

続けて、ユニット4のスピーキングテストですが、これ中学1年生用ですよ。

(教育センター)

それにつきましては、これまでもパフォーマンステストをする時に、生徒とゴールを共有しているのですが、その直前にテストの内容ややり方を掲示するのではなく、単元の始めにこういう目標で、こういうパフォーマンステストを行うということを示した方が、生徒にとっても具体が見えますし、授業にも主体的に取り組むのではないかと考え今年度は授業者用と生徒用のパフォーマンステストに関する資料を作っていこうと提案したものです。授業者用については、担当していない学年の生徒がどこまでできるのかを把握することも大切ですので、授業者が CAN-DO リストと単元の関わりや評価基準が適切かということなどを検討して授業者用を作成することにより、3年間、6年間の系統的な指導をしていくことにつながるのではないかと考えます。

(委員)

分かりました。では、これから実施するということですね。

(教育センター)

はい。

(委員)

中学生を教えたことはあまりないのですが、文字が多いなというのが率直な実感です。これだけ読むのは、たいしたことではないのかもしれませんが。

すべて説明してあげたほうが丁寧なような気もしますが、むしろシンプルに、中学生に求める活動というか、タスクの部分をクリアに示す、こんなことをするんだということが、明確に示される形式がいいのかなと思いました。

というのは、昨年、公開授業を見せていただいた時に、帯授業でスピーキングの活動をやっていました。ペアで、英語で質問をして答えるというものでした。

その時に生徒たちがしていたことは、答えられたかどうか、チェックリストにチェックマークを入れることばかりでした。授業後の協議の時にも申しあげましたけど。

相手がこんなことを言ったので、「へえ。本当やね」とか、「面白いね」とか、そういう相手に関心を持って何かを聞こうとか、やり取りしようという意識ではなくて、答えられたかどうかのチェックだけやっていました。一生懸命、熱心に、真面目に。

それで本当に英語を話して、相手のことを知って、相手を尊重して、やり取りをして、成長していく、楽しく英語を学ぶということになるのかなと感じました。

多分、評価のところでも重要なところだと思いますが、その辺も含めて、スピーキングのテストとか、評価の問題を考える必要があるのかなと思いました。

(座長)

はい、ありがとうございました。

ほかにご意見ございませんでしょうか。

(委員)

昨年も各委員さんがおっしゃっていた記憶がありますが、評価はこういう客観的な評価もすごく大事ですが、その場で先生が即時にフィードバックしてここは改善した方がいいよとか、ここがよかったよということのをその場でやった方がいいっていう、アイデアとかご発言があったように記憶をしております、そういうのも交えた方がいいのかなと。

なぜそういうことを申しあげているかということ、多分、評価というものを客観的な指標として使いたいというアイデアと、もう一つは、生徒自身の意欲とかモチベーションを上げたいという、その二つの課題を解決されたいのかなど、思いました。

前者の方は、確かに客観性とか評価軸をきっちり作って、きっちり評価していくというアプローチで、今書かれている方向性なのかなと思います。

一方、そのモチベーションを上げるための評価というのは、各委員さんが昨年おっしゃられたように、先生がその場でよかったことと改善点を速やかに具体的に、すぐ、口頭でもいいと思うので伝えてあげるといのも、一つ要素になってくるのかなと思います。

(座長)

はい、ありがとうございます。ほかに、ございませんか。

(委員)

次の探究型の方の学習も聞いてから、意見しようかと思いましたがけれども。

今年度は、学習の振り返りというところに注目をなさるといこと、お話を聞いておりますけれども、学習の振り返りというのは、生徒自身が、私はどういう方法でどこまで学習できたのか、もっと深く学ぶためにはどうしたらよいかというのを、その都度振り返るといところだと思います。

しかしながら、それと同時にループリックや評価の明確なゴール設定をしていなくてははいけない。それがリフレクション、振り返りの一点だと思います。

だから、ループリックによって指定された、そのスキルのゴール設定に、どこまで到達したのか、もっと高く到達するためにはどうしたらよいかというところを、生徒自身が振り返りをできるように訓練していくということが大事です。

教科の視点ですが、これはどういった力、どういったスキルを、どこのゴールに設定しているのかということ、明確に最初に示していなくてははいけない。それがまず、一番最初です。

生徒に最初の授業で、この単元においては、今日の学習においては、こういうスキルを、こういうゴール設定で設定しているということ、生徒全員が分かるように、共有していなくちゃいけないという点なんですね。

CAN-DO リストは、大変すばらしいと思いますが、この CAN-DO リストが、知識の獲得のみに偏っていないかということも、注意をするべきじゃないかと思ます。

例えば、スキルの中に、自己管理能力のスキルが入っているか。例を挙げれば、定められた時間内でそのタスクができていたか、それは事前学習もそうですし、授業内での学習もそうですし、できていたかとか。

例えば、コミュニケーションの獲得のスキルであれば、聞く力もあれば、話す力もあれば、発表する力もあるわけですね。もしくは、一番効果的なコミュニケーションの方法で、最終的な答えが出せているかどうかというのがありますよね。

あと、学習方法のスキルであれば、分析する力とか、情報を選択する力とか色々ありますし、考える力であれば、多角的な視点で考えていたか、時間軸ということ意識して考えていたか、地理軸ということ意識して考えていたか。

あと、その課題とほかとは、どんな関連性があるのかというのを考えの中に入れていたか。また、事実をきちんと分析していたか。あと、原因とか要因は何だったのか、それを考えていたかとかですね。

どんな役割や機能というのが、それに与えられているのかということ、分析していたか

とか。それに対して、私はどういう責任があるのか、もしくは私たちは、私たちというのは、クラスの中でもいいですし、高知県でもいいです、日本でもいいです。どんな責任があるのかとか。

そういった視点から考えていけたかとかいうところを、事前に考える力のスキルを上げるということだけではなく、きちんと、この單元では、ここでは、こういう考える力をアップさせましょうといったところで、明確化していくと。

それに関して、子どもが意識して学習するというのが大切なんですね。意識して学習をしていれば、当然ながら、あっ、今回はこういう点を評価されるんだと、いうところの意識がありますから。それで、それに関しては、先ほどのリフレクションと繋がっていくわけですよ。

ですから、ここら辺をきちんと、リフレクションとそれから評価の方ですよ、というのをきちんと繋げていくと。それを最初にはっきりと示すということが大事なのかなというの、私は思います。

(座長)

はい、ありがとうございます。ほかにはございませんでしょうか。

(委員)

まだちょっと考えをまとめてないところで、パフォーマンステストのことに戻りますが自分も難しい勉強をする時に、どれくらい進歩しているかを把握したいんですけど、どうやって把握するか。

テストの結果の事実よりも、それも大事ですけど、例えばこの入国審査のロールプレイはすごくいいんじゃないかと思います。だから、その文法は正しくなくても、ちゃんと答えられるかどうか。

私、よく海外に行くと、ほとんど JAL で行くので、降りる時は日本人と同じように、アメリカとかいろんな所で日本人と同時に入国する。すごくシンプルな質問でも、答えられないことも、聞こえる。なんか助け合いたいんですけど、何もできない。

だから、やはりそういういろんな質問、特にアメリカの方は、あまり予測できない、どの質問を聞くか。

そういうようなことは、やはり楽しいと思うし、やはり一つのパフォーマンステストの方法としては、録音して本人が自分で、例えば、1年生の1学期でどれくらいできる。そして、似ているようなロールプレイを、それか同じロールプレイを、もう1回、1カ月、2カ月後にもう1回録音をして自分で聞く。

自分で進歩しているところを把握できると、すごいモチベーションが上がるんじゃないかと思います。だから、パフォーマンステストの時の会話の方は、やはり自分の言いたいことを伝えるかどうか、それ大事ですね。

そして、なんか一つのテストを2分で、緊張するかなと思って。急になんか私の日本語を2分で測ると、もうなんか困ります。5分の中の一番いい2分とかであればいいと思う。

今、私、ちょっと遊びとして声楽、オペラを習って、もう全然ダメで。もうすごい、毎回毎回、頑張って頑張って、多分同じように、少しだけの進歩があればものすごく嬉しい。

だからやはり、録音して聞いて、その難しいことを少しの進歩でもいいので、それを、その生徒が把握できるとすごくいいと思います。

できないことじゃなくて、できること。だから、CAN-DO リストはすごくいいんじゃないかと思います。

できないことは大体、本人は分かっています。何ができる、それを把握することが難しい。誰か言ってくれるとすごく嬉しいことですね。それだけです。あまりまとめてないですけど。

(委員)

今の、5分の中の2分というのは非常に興味深いというか、スピーキングテストはすごくストレスがかかるので、評価の段階で工夫せよというのは、言われてきていることなんですね。

で、中には段階をつけずに、これとこれとこれはできたら、質を問わずにマルになるというのを入れておいて、あと、その測りたいところで、ABCに付けるとかいう方法も採ってみようと。簡単に挨拶と名前を言えたら、必ず全員に1点が入るとかというふうに、いろんな方法で工夫ができると思います。

先ほどからも話題になっていますけれど、やはり、スピーキングテストを毎回、成績評価のために客観的に取ろうと思わずに、総括的評価として、一定期間を置いたところで客観的な評価を測るけど、通常の單元ごとのものは、むしろ先ほど、葛城さんも言われた、モチベーションを上げる、いわゆる形成的評価とか、個人内評価という、個人を成長させるための評価というのを中心にするという、その辺の狙いを明確にした方がいいのではないかと思いますよね。

毎回、できなかつたら点数が落ちるぞみたいな脅しで、スピーキングテストをやるのは、果たしていいのかなと思います。

(座長)

はい、ありがとうございました。大体ご意見が出てきたと思います。

今回の発表をしていただきました、英語プログラムにつきまして、今、各委員さんの方からお話がありましたように、明確な評価のところは今、協議のテーマになっておりましたので、ぜひ、どのようなスキルをどこまで持っていくのかという、シンプルではっきり分かりやすいものを子供たちに提示しながら、客観的な評価と形成的な評価というものを一緒に、できるだけ入れていく。

そのために、どういう形で取り組んでいくのかっていうようなご意見だったと思いますので、ぜひそういったところを踏まえながら、またこの2回目、3回目と、それぞれの取組の中間的な成果が出てくると思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

それでは、少し走らせていただくような形になりますが、次に、グローバル教育プログラムの探究型学習について、説明をよろしくお願ひいたします。

②グローバル教育プログラム（探究型学習）の本年度の計画と取組について

(教育センター)

それでは、続きまして、探究型学習について説明をさせていただきます。

探究型学習では、主体的、協働的に学び、自分の意見や考えを深め、根拠を持って表現することのできる生徒の育成を目指して、協調学習を中心とする探究型学習の研究に取り組んでまいりました。

昨年度は、国語、社会の教科を中心に協調学習として、知識構成型ジグソー法を取り入れた授業実践を進めています。

授業での発問や問いの研究では、授業のねらいを踏まえ、生徒が思考を広げ、深めることができるよう教材研究、教材開発に取り組みました。

最初は、知識構成型ジグソー法の授業の動きに戸惑いがちであった生徒も、徐々に活動形態に慣れまして、グループの中で自分の考えを、積極的に伝え合うことができるようになってまいりました。

授業実践を通して、生徒自身が他者に、そのグループの中で学んだことを伝えなくてはならないという、エキスパート活動の課題が、主体的に取り組むことに繋がっておりまして、また、ジグソー活動では、生徒の学習課題について、自分では気付かなかった視点が他者から得られ、思考が広がる様子が見受けられました。

また、授業後には学習内容が理解できたと、肯定的に回答をしている生徒がほとんどでした。

このように、知識構成型ジグソー法を取り入れた授業では、生徒が主体的、協働的に学ぶことができ、授業者の意図するねらいに対して、授業理解が進んだという手応えを感じています。

本年度はさらに教科を、数学、理科へと広げて、授業実践を重ね、主体的、協働的に学ぶ授業展開を研究していく予定です。

この取組につきましての昨年度の課題として、まず、授業研究が公開授業のような、大きな行事に向けた取組でとどまっております、教科会等で検討した授業研究が、日常的な授業改善にまで、十分に繋がっていなかったことが挙げられました。

また、主体的、協働的な学びを重視した授業を実践する中で、学習目標や発問、評価規準、振り返りなどが、生徒の実態を考慮して十分に設定できていなかったことも挙げられています。

昨年度のこの会でも、探究型の学習には、コアと内省が必要であるというご意見をいただきました。

教科のコアに繋がる本質的な問い、これを学習課題とすることや、内省となる振り返りが機能していくためには、生徒の実態を踏まえた学習目標・学習課題・評価規準、そういったものが明確になっていることが重要であると感じております。

また、ICT 機器は授業の中で活用が増えてはいますが、授業のねらいにに応じて、効果的な活用にはまだまだ至っていないこと、また活用事例の収集は、十分ではないことも課題として挙げられます。

そこで、このような課題を受けまして、平成 28 年度は、協働的な学びによる思考の広がりや深まりが生徒に実現できるように、さらに深い学びに到達する学習指導に着目しております。

本年度の取組について、説明をいたします。

本年度は 2 年目の研究ですので、昨年度から引き続き生徒が探究することができるような発問、問いの研究、また、生徒が思考を広げ、深め、表現できる効果的な指導法とその評価について、評価項目やワークシートなども併せて研究をしていきます。

適宜、外部機関などからの新しい情報を取り入れながら、協調学習を中心にした主体的な学びを実現する授業を、探究型学習推進チームや教科会が連携して実践し、その実践事例を第 2 集として、年度末作成をする予定です。

それでは、元の資料に戻りまして、本年度 4 月から 7 月までの取組について、資料に協調学習の授業の具体的事例を載せております。知識構成型ジグソー法を取り入れた授業を、6 月に国語で行った事例です。

生徒の感想からは、課題文から筆者が伝えようとしていたことを、多面的に捉える視点

が増え、他者の考えを聞くことで、考えが広がっている様子がうかがえます。そしてこれは、授業者の意図するねらいと一致をしていたということです。

また、授業のねらいをより効果的に分かりやすく伝えるために、ICT 機器を活用することで、学ぶことを生徒が視覚的に把握し、すぐ全体協議をすることができて、与えられた課題から、自分が何ができるようになればよいのか、目的意識を持って考えることができたように思います。

生徒の自己評価からは、本時のねらいを達成できたとか、自分の意見を書くことができた、話し合いで考えを深めることができた、そういった、項目に対して肯定的評価が多くありました。

ジグソー活動での、グループの意見を発表する場面では、授業で使用したパワーポイントの右端のスライド画面のように、発表の型を示したので、空欄を自分たちの班の意見で埋めるように、根拠立てて発表ができていました。

しかし、その後の、自分の意見をまとめたワークシートの記述を見ると、根拠を持って文章にまとめることには、十分でないものが多く見られたということです。

このことから、生徒はグループ活動で話し合っ、思考が広がったことで授業の満足感のようなものがあつたので、自己評価としては高くなつてはいるのですが、グループで深まった考えを、一人一人の力で言語化して、表現するには至つていなかったということが、課題として今回分かつたことです。

今後は、その学習課題に対して、自ら思考を深め、一人一人の理解が定着できるよう、授業のねらいに照らし合わせた振り返りを、より意識して授業構成を検討していきます。

また、思考の深まりを言語化したものを、適切に評価できる評価方法などを、授業実践や教科会などを通して、検討していきたいと考えております。

協議事項としましては、作成しました今回の事例集を活用して、主体的、協働的な学びを実現できるような授業のポイントを、校内研修などで普及をしていきたいと考えています。

事例集には、知識構成型ジグソー法を取り入れた授業を事例として、主体的、協働的な授業づくりの留意点について、授業の基本のつくり方だけではなくて、生徒に身に付けさせたい力や評価規準を明確にすること、問いや課題の設定のヒントなど、どの授業でも共通して必要なことを示しておりますが、さらに主体的、協働的な学びに向かう授業を提案し、普及していくために必要な観点にはどのようなものがあるのか。

また、今年度は、深い学びに迫る授業づくりのポイントを提案していくということを踏まえて、思考の深まりに至る指導と評価に、どのような観点が必要になってくるのかについて、ご意見をいただけたらと思います。

以上で説明を終わります。

(座長)

はい、ありがとうございました。

二つ目の協議としまして、探究型学習の本年度の計画と取組について、教育センターの方からご説明がございました。

それでは、各委員様、それぞれご意見、あるいはご質問をよろしくお願ひいたします。

(委員)

この探究型学習の事例集の5ページのところに、生徒の振り返りのところの話が出てい

るんですけれども、実際にやられてみて、この深まりが先生方から見られてどうなっていたか。

それから、生徒の立場で、深まっていると言っている深まり方が、どういう深まりだったのかということについて、ちょっとまだ、何か情報があれば教えていただきたいんですけれども。

(教育センター)

先ほどの質問に関してですが、この知識構成型ジグソー法では、話し合いをする前に、まずは既存の知識を基に課題に取り組んで、そして、話し合いの後、もう一度振り返りをして、最終的にもう一回同じ課題について、自分の考えを書きます。

それによって、どれだけ考え方が広がったり、深まったりしているのかということの評価するのですが、それが、5ページの上のところに出ております。

A, B, C, の問いにつきまして、最初はこういった記述だったけども、話し合いを通じて、今まで本人が持っていなかった色々な視点とか、考え方とかが入ってきて、最後の記述に繋がっているということがわかると思います。

生徒自身も話し合いをする中で、自分自身が今まで考えてもいなかったようなことを、知ることができて、そして、そういった見方もあるんだなということ、改めて感じる事ができたとか、話し合いが深まっていくことで、自分の考えも深まっていったとかいうことを多数の生徒が述べています。

ただ、本年度実施をしました事例を見てみますと、最後に記述の部分で、少し課題があったとありますが、生徒自身は話し合いをする中で、確かにこういうような発見があったとか、自分が今まで気付かなかったことに気付いたとかいう意見が出てきて、非常に考えが深まったという、自己評価が高い部分はあります。

しかし、実際、書いた記述を見てみますと、もうちょっと様々な観点から、こういったところももう少し深く掘り下げて、振り返りを書いてほしかったとか教員の側から見たら感じる部分もあります。

ただ、この授業に関しましては、時間的な制約がありまして、十分、生徒がそういったことを書く時間が取れなかったということがあるんですけれども。

そういった点で、生徒自身が考えが深まったと言っているけれども、もっと掘り下げて、このことについては考えて、振り返りがほしかったということなども、まだまだ課題としては出ております。以上です。

(委員)

この振り返りと、またその深まりというのは、それは大学でも課題にはなっていて、実際にディスカッションとか議論の場を見ていると、いろんな気づきが相互の発言の中で出ているんですが、ここに、前にあるんですけど、言語化の段階になると、それが表現されてないんです。結構多いんです。

これは、今の大学というのが、時間をなるべく取ってやってみたり、授業外学習で出してみたり、色々やっていますけれども、現時点で見えてきているのは、相当時間がかかるので、すぐは成果が上がらないのかなと。

これは今、大学1年生、2年生を見ているんですけども、ただ、やはり気付いたことの、その意味をもう一度考えるという、なんかチャンスというか、そういうアドバイスとか。

ちょっとそういうのを繰り返しながら、多分、1回、2回では、おそらく言語活動は難し

いので、ちょっとやはり時間、少し長いスパンで見て、こういう気付き方があって、これをこう理解したっていう、消化していくプロセスが、かなり時間がかかるものだなと思います。

ちょっと大学で出てきているのは、段々やっていくうちに、振り返り疲れというか、これ前もちょっと言いましたけど、段々やっていくと、文章を書くのが疲れてくる。で、それを評価する教員が疲れてくるというようなのが、ちょっと出だして。

まあ、教員も生徒もなんとなく、相互に伸びているよねという、実感を持ちながらやっていくと多分もつんですけど、途中で割と教員が疲れてしまうことも結構あって、細かく見ていると。

その辺は、誰でも工夫がいるなというように感じていますし、長い時間の中で伸びていく、深まっていくとか、そういったものの見方を、これは答えが全然ないものなのかもしれないけども、やっていかないといけないなというふうに思います。

その意味で、先生方が、生徒が疲れないように、深まっていく楽しさというか、ああ、やっぱりそうなんだという実感をうまく残していくような、なんですかね、言語化ももちろんそうですし、ちょっとそこら辺の工夫を今後、今年特に、振り返りというものを中心にやっていく際に。

これは多分、英語でも共通しているものがあるんだと思いますけども、つくっていく、もしくは考えていくところがポイントかなというふうに思いました。

(座長)

どうぞ。

(委員)

今さら、私が気付いたことで、お恥ずかしい次第なんですけれども、このグローバル教育プログラムというのは、英語教育と探究型学習というふうに分かれており、探究型学習は、国語、社会、数学、理科という形なんですけれども、これはなぜ英語教育の方と学際的になってないのかっていう疑問が、私一つあるんですね。

特に、例えば、国語と英語なんていうのは、これは言語学習ですので、同じスキルを育てていかなくちゃいけないっていう点があるんですね。

例えば、中1とか中2の英語に関する基礎能力をつくる部分というのは、それができるまでの基礎ということで、というのはある程度理解できるんですが、これを見ますと、中3とか高校生でも、英語だけが学際的になっていない。なんか理由があるのかな、と思ったんですけれども。

例えば、この中で、国語の中で目標として、人間のどのような本質が描かれているのかっていう目標がありますよね。これはまさに英語でも、できることでありますし、社会科ともくっつけても非常に相性いいですし、数学、理科も。

これを見ましたら、ギリシャっていう窓を通じて、世界経済を、金融システムというところを探究していくっていうのもあるんですが、これも英語と大変相性がいいですからね。

これは、何か理由があって、英語教育だけを外したのかどうなのかというのが、ちょっと私のお聞きしたいところです。

(座長)

はい、ありがとうございます。いきさつ上、私が直接関わっている分もあるので、説明いたします。

探究型学習については、これは英語を外してということではなくて、すべての教科で、それぞれの教科、あるいは効果的に併せた教科の中でやっていくとかいうことで、その手法として、協調学習というものを使って取り組んでいきたいということで、出発をした経緯がございます。

一方、英語教育については、やはり新たなグローバル教育の、統合した学校を進めていくにあたっては、やはり英語というのも一つの大きな言語として、獲得していかなければならないものであらうと考えた場合に、そういったところで、高知県の現状を見ると、やはり、獲得しなければならない英語教育の内容は、なかなかまだ十分ではない部分もあると。

両校については、そういった意味で、国際科であったり英語科があって、イニシアティブを取る学科はあるけれども、全体として見てみると、やはり英語の体系的な教育活動の部分が十分、出来上がってないということがあって、一方、英語教育プログラムという形で、全体の体系をまずつくっていかうと。

当然、そのプログラムの中では、まさしく協調学習という形のものも、やっていくことも想定をされていたということでございます。

出発点は二つ走らせていますけれども、すべては共有するものであるということで、できればこれから、こういった委員会でご提案させていただきながら、それを全体として、各教科の中で、あるいは教科同士で活用をしながら、効果的にやっていきたいということでございます。

英語が切り離されたという部分ではなくて、一緒に協調学習はやっていくということだということです。

(事務局)

失礼します。ちょっと補足をさせていただきます。

当初、始まった時に、英語教育プログラムについては、一つは型を教育センターの方で示して、それをどういうふうに南中高で実践して、南独自のプログラムに変えていくかっていうことを、今研究してまいりました。こういった成果を、ほかの市町村の中学校とか県立中学校に普及していこうということで、ずっと進めてまいりました。

一方で、探究型の方は、一つのキーワードとして、知識構成型ジグソー法という一つのフォームをキーワードにして、探究型学習に取り組んでいったら、どういうふうになっていくのかということに取り組んできた。

ですから、やや、どうやってやっていくかということに、お話がいつてしまっているの、学校としては一つの組織ですから、そこは繋がっている。

ですから、ジグソー法についても、英語もぜひやっていただきたいというような整理なんですけれども、今改めてご指摘いただきますと、確かに今、評価が非常に注目されますので、そういう意味で、色々な各教科が学際的に繋がっていく観点というのが、ここで大事なのかなと。

ですから、教育委員会として出している部分は、二つのフォーム、やり方について着目しているので、あたかも二つ走っているように見える。学校としては、それを一つの組織の中でやっていますので、今後どういうふうに繋げていくのかっていうことは、大事になっていくのかなと。

今の、さっきの英語プログラムでのご指摘なんかも聞いていると、例えば、そういうところが大事なんだなということが、我々もよく理解できて、深まったのかなというふうには思います。

(委員)

ありがとうございます。母国語での学びのうえに、同じ窓から第二外国語をのせていくことにより、生徒はより理解が深まるのみでなく、モチベーションが非常に上がるというふうに思いますので、より効果的かと私は思うんですね。

一つ論文を書くということでも、日本語での論文の書き方と英語での論文の書き方、共通点、これありますからね。だから、そういった形でこれからお進めになられると、よりよろしいのかなっていうふうには思いますが。

(高知南中・高等学校)

学校サイドで、先ほどのことを、ちょっと付け加えさせていただきます。

一つは、学校の研究体制として、本校は国際科と普通科からなる学校ですので、国際理解教育も長年取り組んでいたということ。

それから、探究的な学習の部分では、キャリア教育にずっと携わっており、一定の評価も受けているということで、まず、グローバル教育を推進をする中で、英語、それから探究という頭出しの中で、非常に従来の学校の流れと合致して取り組みやすいということが、先生方にもムリなく浸透できるんじゃないかという考え方もありました。

それから、英語につきましては、英語といいますか、英語の探究的な取組というのは、当然やっているところでもありますし、今年2学期に英語教員がジグソー法を使う形で、授業公開も予定をしています。

その教員は、昨年度、広島県の方に1年間研修で行って、中学校の英語教育ですけれども、そこで学んできたことを、英語教育の中でもジグソーを実践できるということを確信していますので、それを本校で今年、公開授業ということを考えております。

付加して説明させていただきました。

(座長)

かまいませんでしょうか。

(委員)

根拠を持って言葉や文章で表現できるようにする、というのが大きな課題だという話があって、先ほどの石筒先生の大学でやっている実践が、すごく参考になると思うんですけども、年に1単元、知識構成型ジグソー法でやったからって、できるようになるはずは絶対なくて、すごく時間もかかるものだし、先生も生徒も大変。

それをあえてやろうとするのであれば、どんなふうに日常の授業に、話すこととか書くことみたいな活動を入れるかですよね。

ちなみに、この国語の授業なんかでは、年間、話すとか書くという活動をどの程度やっているのかということが、大きな問題であって、この「猫また」の単元だけ知識構成型ジグソーでやって、書かせて書けないのであれば、まあ当然のことです。

英語でも書くというのは、すごく大変なことですよ。それを、時間をかけて少しずつ成長させていくためには、どれだけそれに時間を割くかということも大事になってくるのかなと思います。

(座長)

はい、ありがとうございます。

(委員)

はい、ありがとうございます。

もうすでに、そういうご予定があるということなんで、すごい安心はしているんですけど、多分この話は、観点が二つあるかなというふうに、お伺いして思っております。

一つは、英語自体を、こういう探究型学習とかジグソー法で勉強していくっていうのが、まずアプローチとしてあります。

ただ、これは今、学校の方からお話がありましたとおり、もうすでに予定されていたことなので、多分、そのままお進みいただければいいのかなというふうに思っています。

もう1点が、他教科の中で英語を使っていくというのが、多分あると思うんですね。さっきも、坪谷先生もちらっと言われていましたけど、例えば、ギリシャの問題とかを社会科で扱う時に、当然これは何かを調べようと思ったら、昨年ちょっと私の方でもご説明させていただいたかもしれませんが、圧倒的に、英語で調べた方が情報量はあります。

だから、何かをリサーチするうえでとか、何かを学習するうえで英語を使っていく、一つのツールとして、英語を使っていくというやり方があるって、英語を組み合わせていくっていうのは、その二つのやり方があるかなというふうに思っています。

前者はもうすでに、ご計画をされているということもありますし、後者は、先生がそれに対応できるかどうかという、また色々課題とかご状況とか、ご環境も色々おありかとは思いますが、一応そういうアプローチも、選択肢としてはあるのかなというふうに、お伺いして思いました。

(座長)

はい、ありがとうございます。

ご意見、それぞれありましたけれども、高知南中高であれば、マネジメント学習の実践があります。そういった中において、まさしく先ほど委員さんが言われたような、英語の部分の中で活用していくとか。

そういったところへ繋げていくっていうのは、課題を見出して、その課題を解決するためのマネジメント学習の中に、それを調べる、あるいは、地元であったり、日本だけでなく、海外の情報をつかみながら、そして解決する方法をつくると、そういったところには、英語がまた使えるんだと。

そういったところは、南中・高等学校については、まさしく素地があると思いますので、今のご意見は、非常に参考になるのではないかなと思いました。

(委員)

まさに今、ちょっとおっしゃっていたのは、私の言葉が足りなかったんだと思うんですが、学び方がそういうジグソーであるとか、それは英語でもこれからおやりになるっていうところもおありかと思えます。

そうじゃなくて、窓を一緒にするっていうところなんですね。

例えば、国語の方で、先ほど言った、人間の本質とは何なのか、ということ窓とするのであれば、英語の方でもその窓を一緒にすると。それは、英語は第二外国語ですから、例えば、それは読む本が『イソップ』だってかまわないわけですよ。

でも、その目的としては、その中から人間の本質というのは何なのか、という問いを子どもたちに投げかけて、それに対する答えを子どもたちが出していくと。

それは、国語でも英語でも同じということで、ちょっと繰り返しになりますが、母国語

でそれを一旦学んで、第二外国語でまた学ぶと、より深くなっていくというところなんだと思うんですね。

ですから、学び方ではなくて、学際的に窓を一緒にするっていうところを、ちょっとお考えになられると、よりいいのではないかというふうに思う、ということをちょっと言ったので、言葉が足りなくてすみませんでした。

(座長)

はい。

(高知南中・高等学校)

ありがとうございました。

本年5月に、東京大学 CoREF (コレフ) が主催をする、「新しい学びプロジェクト」というセミナーに参加してまいりました。

その時は、協調学習、ジグソーが主題でありましたけれども、ジグソーが一定、型ということが一定浸透したと。

やはり、進化をするためには何が必要かということ、やはり深く掘り下げた問いが必要であるということで、今後…形だけにとらわれてきたといいますか、そこが主題になってきたんだけど、すごく、本当にこれが生徒に付けたい力、身に付けさせたい力を体験できる学習課題、それはすなわち、ジグソーでいえば、問いがしっかりできるかということが、今後の課題になっているというお話を聞きました。

で、ひるがえって、今年、資料にありますように、年3回のスケジュールの中で、指導の工夫とか、到達目標に向かって主体的な学び云々ということで、最終的には、自分で課題発見、解決、考える力を身に付けているというところまで、研究していこうというスケジュールがあると思います。

私らの問題意識として、英語も探究型もそうなんですけれども、その裏のページに、昨年4回の実施の中で、委員の皆様からいただいたご意見で、やはり授業の改善、在り方というのが深く問われていると思います。

今年も、1学期が終わろうとしていますけれども、1学期にもいろんな授業を見たり、いろんな方々からもアドバイスをいただく中で、やはり、授業のねらいでありますとか、身に付けさせたい力、それから、学習課題の設定とか、その授業の中で本当に明確になっている授業には、なかなか行き当たっていません。

私は、授業を見に行く時も、授業途中で見に行くケースも多いんですけども、最初からでなくてですね。だけど、その授業が本当にねらいとか、どういう着地とかゴールとか、学習課題とかいうところが、非常にはっきりしないと。

後で授業者と協議をする時も、授業の途中で行っても、ねらいとか、そんなのをしっかり示して、参観の方にどういう授業なのかを明確にしてほしいと、いうふうな話をする機会が多かったです。

そういう面で、高知県には教育委員会とセンターがつくった、授業づくりの Basic (「高知県授業づくり Basic ガイドブック」) がありますので、あれを年度当初に私も示して、授業づくりはこうしようという話をしましたけれども。

まだまだ、探究型学習とか入っていく以前に、授業が、ねらいとか学習課題の設定とか、まだまだ弱いように感じていますので、今後軌道修正をしていきたいと思っています。

あちらこちらになって申し訳ないですけど、最近見た指導案で、教育実習生が保健体育で作ってくれていた指導案が非常に優れてたので、ちょっとびっくりしたんですけど。

A4 ワンペーパーで、水泳の単元でしたけれども、8時間を横軸にして、縦軸に1時間の、50分の中身を最初の準備体操から含めて、最後の終わりの体操まで含めて、この1単元で、1時間で何をやるかが時間帯ごとに帯でしっかり示されていて、内容もゴールもはっきりするような、そういう仕組みがありました。

そういうことで、単元で身に付けさせたい力とか、授業の学習のねらいとかが、そこでしっかり表現できていた。

さらに授業デザインの方面からいっても、段々時間が、水泳の時間、取り組むに従って、泳法を変えたり、あるいはタイムトライアルの時間を増やすとか、そういうふうな工夫があるんですけども、そういったことがしっかりできていた指導案だったなと思って、ちょっと関心をして。

そんなのも含めて、やはり身に付けさせたい力、単元の構成とかいうことをしっかりやっていきたいと思っています。以上です。

(座長)

はい、ありがとうございました。学校の方からも、今後の方向性についてお話がありました。

まとめをさせていただきますと、やはり、今回の協調学習につきましては、特に昨年度、国語、地歴公民・社会といったものについては、ある意味、型をしっかりとやれるような状況をつくってきたと。

今年は、数学とか理科とか、そういったものに広げていくと。

じゃあ一方、今年は、国語、社会については、やはり課題として先ほど出ておりました、子どもたちの言語化するという部分についての課題があると。

そこを考えるとやはり、長崎委員も言われましたけれど、日常の授業の中で、じゃあそこに繋げていく、協調学習をやったその内容と、それから普段の授業と、そこがどうリンクするか。

そういったところの、子どもたちの深まりという部分を繋げていくっていうのを、まあ国語、社会については、ぜひやっていただくことが、新たなさらなるステップアップになるのかなと。

また、その際、協調学習を進められた全教科にわたって、やはり、坪谷委員も言われましたけど、窓を一緒にする。いい言葉だと思うんですけども。

ここをしっかりとやっていくことが、まさに教科の協調学習ではなくて、学校全体として子どもたちに付ける力を、どう教育活動の中で繋げていくのかっていうところにも、繋がっていくんじゃないかというご意見でしたので、よろしく願いいたします。

それでは、次に、三つ目の協議題に移らせていただきたいと思います。

高知西高校において、スーパーグローバルハイスクール事業に対する取組と報告ということで、よろしく願いいたします。

(2) 高知西高等学校における取組

① スーパーグローバルハイスクール事業における取組と報告について

(高知西高等学校)

資料4の方をご覧になっていただければと思います。

まず、昨年の本会の、第4回目でもお話させていただきましたけれども、少しプレビューをさせていただきます。

本校の目指すグローバル・リーダー像というのは、高知に、日本に、国際社会に貢献できるような人材を、グローバル・リーダーというふうに位置付けておりました。

そのグローバル・リーダーの資質・能力につきましては、いろんな分野の方が、いろんな資質とか能力というのを掲げられておりますけれども、本校といたしましては、文部科学省のSGHの募集要綱に書かれてありましたこととか、あるいは、スーパーグローバルハイスクールというものが最初に登場してきたのが、平成26年の「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」だと思っておりますけれども、そういったところ。

それから教育再生実行会議、それから本県のグローバル人材像、それから本校の教育目標、そういったものを勘案いたしまして、この五つが本校の目指す、グローバル・リーダーにとって必要なコンピテンシーというふうに、位置付けさせていただいております。

じゃあ、そこに迫るために、どういうふうな教育課程を開発していくかというところで、二つ目は仮説なんですけれども、一つは地域課題というものに対して、虫の目とか鳥の目、しいては魚の目といったものを活用していけば、一定、こういったコンピテンシーというのは身に付いていくんじゃないだろうか。

とりわけ、課題発見、課題解決能力というのは身に付くんじゃないかっていうところがございます。

二つ目は、英語の学習です。グローバル・リーダーにとってみたら、英語というのはやはり、ツールとして必須でありますし、英語特有の表現というものが、論理的な思考力とか、あるいは考察力というものを高めていこうし、コミュニケーション能力というのは、もとよりあるんじゃないか。

この二つを教育課程上の仮説と捉えて、進めてまいってきているところでございます。

次に、昨年の結果、どうなったかというところですが、昨年の第4回の本会において、51項目で生徒に意識調査を行ったというお話をさせていただきました。

その51項目を統計処理を行いまして、確認的因子分析という手法を用いまして、結果的には25項目まで絞ることができました。

厳密に申しますと、この時の幅広い知識と教養に関しましては、適合度というのがちょっと低くて、新たに3項目追加しまして、この5月に、4月の下旬から5月にかけてですけれども、実施しまして、適合度の比較的高いものが出来上がりましたので、最終的には25項目の尺度、「グローバル・リーダーの資質・能力に関する意識調査」という尺度がここで完成いたしました。

それと、もう一つは、従来の学年に比べて、非常に出席状況がいいというお話をさせていただきましたけれども、こういったところが自己管理能力、これもグローバル・リーダーにとっては必要な部分だと思っておりますけれども、こういったところも身に付いているというふうなことが言えるんじゃないかというのが、昨年の成果でございます。

その反対に、課題といたしましては、一つはSGH連絡協議会なんかで使われている言葉として、「授業のSGH化」という用語があるんですけども、この探究授業以外の、普通教科の授業においても探究できるような、「why? because」を使うとか、「it is said that」とか「I think that」とか、そういったところで探究していけるような授業の広がりをもつということが、昨年の課題であると。

もう一つは、評価研究ですけれども、生徒の自己評価を測るための尺度は完成できましたけれども、その一方で、教員の方が生徒を評価する部分、定性的な内容をいかに定量化して測っていくかっていう、そういった評価、ルーブリックというのは必要でありますし、先ほどから出てきております、形成的評価、毎時間の振り返りシートの精度を高めていくっていうところが、やはり課題として残っております。

三つ目といたしましては、中四国の SGH 校でありますとか、SGU とどういふふうに関連していくかというところが、課題として挙がりました。

今年度、28 年度の計画なんですけれども、まず一つは、主題である、資質・能力の向上をいかに図っていくかというところなんですけれども、これはこの 5 月に、新 1~2 年生を対象にこの意識調査、25 項目による意識調査を実施いたしました。

その結果が、2 枚目になっております。ご覧になっていただきますと、分かりますけれども、ほとんどの項目で 1 年生の意識の方が高い結果が出ました。

これ、どういふふうに解釈するかっていうところなんですけれども、1 年生に関しましては、本校が SGH の取組をやっているということ、もう分かったうえで入学している生徒たちですので、意識が高いと読み取ることができるかもしれませんが、もう一つは、心理学という素朴理論でありますとか、エリクソンという自己過信なんか該当しているのかなと。

すなわち、入学時においては、一定、幼児的な万能感と申しますか、そういった自信というものがかなりあって、高校生活を送っていくうえで、考査とか、あるいは部活動とか、先輩との関係とか、そういった諸々の関係の中で、段々段々、そういった自己の持っている意識というものが低下していくんじゃないかなと。

2 月に低下していて、2 年生になって若干回復していったら、3 年生になったらやや上がっていくというふうな仮説を、私自身は持っているんですけれども、そういったところによって、こういうふうな 1 年生と 2 年生の結果の差っていうのは、できたんじゃないかなというふうに思われます。

その次のページに実は、この 25 項目において、現 2 年生、1 年生の 2 月と、それから 2 年生の 5 月次に比較したものですけれども、2 月から 5 月にかけては、若干緩やかに回復しているんですね。

だから、2 年生自身、今申しました仮説が、ひょっとしたら妥当かなというふうなところでございます。

ただ、この 2 年生がまた、29 年 2 月にこの調査を行いますので、現 3 年生が 2 年次に行った調査結果と比較した時に、有意差が出てきたら、一定やはりこの取組というのは、意味がある取組んじゃないかなというふうに思われます。

あるいは、できたら、他校との比較ができていったら、より教育課程の有効性というものが検証できるかなというふうに思われます。

それから、もう一つが、この 25 項目に対して、教員が評価できていったらいいかなというふうに思っています。

ただ、一番上の 4 項目、「世界の中での日本人としての文化的アイデンティティ」というものを、教員の方で読み取るのは非常に難しいと思いますので、残りの 4 つの項目に関して、7 件法で、十分満足できるから不十分であるまで七つで測れていったら、非常に、生徒の自己評価と教員による評価っていうものを照らすことができますので、一定、その取組に関しては、妥当性を持つと言えるんじゃないかな、というふうに考えておりますけれども。

ただ、教員に対する負担というのは非常に大きいので、まだまだこれから、研究していかなければならないのかなといったところでございます。

では続いて、裏面になりますけれども、教育課程の内容です。

昨年度、「グローバル探究 I」の中で、課題研究というものを行ってまいりました。結果といたしまして、創造的思考力というのは、十分開発できたかなというふうに考えられます。

その一方で、探究の視点とか方法とか、そういったものを学習する機会というのは、少なかつたかなというふうに思っております。そういう意味で、今年度のグローバル探究Ⅰでは、そういったところを盛り込んでいく。

それから、グローバルな視点というものも盛り込んでいくというところが、本年度の課題となっております。計画の中には、そういったところを反映した計画を作っているところですよ。

リサーチ活動に関しましても、非常に有意義な活動であると思っています。ただ、昨年に関しては、準備期間というものが非常に短かったので、今年度はもうすでに、リサーチ活動の準備をしているところですよ。

新たに、今年度は台湾を設定いたしました。どうしても経済的に厳しい生徒がおりますので、台湾に関しましては、比較的安く行けるということで、台湾というものを新たに海外リサーチの中に盛り込みました。

英語に関しましては、プレ学習、1年生の中では実は、SGHの計画の中に英語は計画してないんですけども、プレ学習として、1年生で英語というものを活用していくことによって、2年からの探究活動に繋げていこうということで取り組んでおります。

それから、2年生ですけども、2年生に関しましては、もう今、課題探究活動を行っているわけですけども、問題の所在を地域課題から出発するグループと、グローバル・イシューから出発するグループと、両方あります。

そういったものをいかに、エビデンスというものはっきりさせていく中で、論理的な思考力を用いて、問題の所在というものを明確化させるかということに、今苦心をしているところですよ。

で、構想発表というのを7月の14日に行いまして、中間発表を10月の26日、それから成果発表を2月の22日というふうに、計画を立てておりますけれども、中間発表に関しましては、県内の大学の先生方においていただいて、徹底的に叩いていただきたいというふうに今考えているところですよ。

2年生もリサーチ活動を行いますけれども、こちらは、自分の課題に対応できるようなリサーチ活動を行うということで、1年生よりは随分、中身は充実した活動になっていると思います。

英語に関しましては、今年度、英語による探究ということで、「信念／信仰と食」「食とフェアトレード」、それから「言語／習慣と食文化」というところで進めてまいっています。

教育課程外、学外での取組になりますけれども、探究学習の成果というものを発表する場というものを設定して、よりモチベーションを高めていきたいというふうに思っております。8月の6日から福島の方でありますけれども、「ハイスクール世界サミット in 福島」への参加。

それから、11月の25～26日ですけども、本県の黒潮町の方で開催される、「世界津波の日『高校生サミット』」でありますとか、それから、「高知県地方創生アイディアコンテスト」なんかにも応募したり、それから、2月の初旬に大阪大学の方で、兵庫県主催の「国際問題を考える日」なんかにも参加させていただいて、こうした発表等をさせていただく予定でございます。

以上、今年度、こういった活動で進めてまいりたいというふうに考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

(座長)

はい、ありがとうございました。

高知西高校の、スーパーグローバルハイスクールのご報告でございました。ご意見、ご
ざいませんでしょうか。

(委員)

今、ご発表いただいて、1年生と2年生は、きちんと割とループリック、決まっている
んだなあって、今初めて気が付いたんですけれども。

ここの中で、色々細かく、世界の中での日本人としての文化的アイデンティティという
こととか、知識と教養とか決まっていて、これは授業の最初に子どもたちに対して、この
学年では、こういうことの力を伸ばすために、授業をやっているんですよといったところ
を、きちっと共有してらっしゃるのかな、というのが聞きたいなと思ったところで。

これを活用していけば、結構できているんだなと思いました。

あともう一つは、グローバル・リーダーの育成の、「目指す姿と資質・能力」っていうと
ころなんですけれども、「郷土や我が国、国際社会の発展に貢献する志をもち」って書いて
あるんですけど、これまさにそのとおりなんですけどね。

ただ、子どもが読むと、なかなかこれって言葉だけで、よく分からないっていうところ
があると思うんですが。

これは私の意見なんですけれども、グローバル人材ってなんなのかなという原点から考
えてみると、要は、自分が好きなこと、自分が得意なことを通じて、より社会を、共生で
きる平和な社会にするっていうことが目的なんだと思うんですね。

その社会っていうのは、例えば小さい社会であれば家族であるし、家族とかクラスとか、
もうちょっと大きくなれば、学校とか。それから高知市、それから四国、日本、アジア太
平洋、それから世界、そして宇宙ってふうに、この社会っていうのは大きくなっていく
んですけれども。

どんな小さな社会でも、大きい社会でも、自分が得意なこと、好きなことを通じて、よ
り社会が平和になるように、より社会が多様性を受け止めて、共有できるようにしていく
ということですね。サステイナブルにしていくっていう目的なんだなっていうところが、
子どもたちが理解すればいいんだと思うんですね。

それが例えば、子どもが、今ここで書いてあった、食のなんとかですかね、というこ
とで、一人の子が掃除が得意と、きれいに片付けるのが得意というのであれば、それでも立
派なその子の好きなこと、得意なことですから。

じゃあ、片付けるのが得意、きれいにするのが得意っていうことだったら、それを活か
してどんなふうに社会貢献できるのかなっていう観点から、子どもを認めて、その努力を
伸ばしていく、好きなことを伸ばしていくっていう考え方であると、子ども一人ひとりの
肯定感が増してくると思うんですね。

ですから、そういう観点で、子どもたちに説明していくと、ふっと腑に落ちるんじやな
いかと思います。

(委員)

今年度、グローバル探究が1年生と2年生で、両方走るような形になったと思いますけ
れども、その時の二つの学年間の情報共有の仕方って、これ、探究Ⅰの方は、昨年度、探
究Ⅰで開拓していった苦労を、うまく吸収しながら改善していくステージに、多分なるの
ではないかなと思います。

で、探究Ⅱを担当されている先生は、引き続きフロンティアでずっとやって、大変だと思わなくても、特にやはり、27年度の経験を踏まえて、探究Ⅰの改善方法というか、その2年目に入った時の、昨年度の課題も踏まえて、どのような形で今年度取り組まれようとしているのか、それについて。

(高知西高等学校)

はい、今年度に関しましては、このSGHを推進する校内で、分掌、校務分掌を設置いたしました。

それで、毎回のそのグローバル探究Ⅰ、グローバル探究Ⅱの前週において、授業探究チームというのがありまして、グローバル探究Ⅰ・Ⅱ、両者ともその探究チームに入っております、その放課後に設定している時間でもって、来週こういった内容で、再来週はこういった内容でやるということを出しておりますので。

グローバル探究Ⅱの担当の方からのアドバイス等もありますので、一定そういったところでは、昨年度の課題なり、成果というものは、繋がっていったところがございます。

(委員)

ちなみに、今、探究Ⅰと探究Ⅱで関わっている先生方というのは、全体のどれぐらいに今、なっていますか。

(高知西高等学校)

授業探究チームは、管理職を含めて、約10名近くだと思いますけれども、ただ、学年団でやっておりますので、1年生、2年生の生徒担任も関連してまして、校内の組織においては、もう3分の2の教員が関わっているということです。

(委員)

はい、ありがとうございました。

(委員)

グローバル探究Ⅰを1年やってみての評価を、お聞かせいただきたいと思います。

いくつかの学校で、こういう主体的な学びとかに関わっていますが、なかなか難儀しています。先生方がやはり、知識伝達型の授業でないと居心地が悪いみたいなどころがあって、本当に子どもたちが自分のやりたいことを見つけて、夢中で取り組むっていうふうなことになってなくて。

結局なんか、準備してきたものを与えるみたいなことになってしまっているの、この1年目、実際、どんな体制で、どんなことをやって、どうだったかという評価を簡単にお聞かせください。

(高知西高等学校)

グローバル探究Ⅰですね、結論から申しますと、生徒たちの評価は非常に高いんじゃないかなというふうに思っております。

先ほど申しましたように、創造的思考力っていうところで、自由にとにかく考えていいんだ、高知を良くするためのアイデアというものを出していこうというところで、積極的にその辺りは、生徒たちが出していきました。

その結果として、先ほど申した、自己管理力の育成、出席率の向上というふうなところにも繋がっているかなというふうに思いますので、生徒の評価というのは、非常に高いというふうに考えております。

その一方で、教員の方は、先ほど長崎先生が言われましたように、やっぱり、創造的思考、アイデア勝負だけではやはり、探究というところではダメだろうというところで、もっと問題の本質、問題の背景といったものも、1年次から探究していく必要があるんじゃないかというふうな意見が出ております。

それから、もっとやはり、文献とかいうところにも一定、関わっていかねばならないんじゃないかというふうな意見等が出ております。

そこら辺り、どの程度、どういったバランスを取るかというところが、本年度の課題かなというふうに思います。

(委員)

分かりました。

(委員)

知識構成型ジグソー法のことなんですけど、前に多分、なんか似ているようなことを聞いたという気がするんですけど。

最初のところで、「世界の中での日本人としての文化的アイデンティティ」、それ、その項目を見てみると、いろんな意味になるので、要するに、日本人としてのアイデンティティは、様々な日本人が、日本にいるという視点からできるかどうか。やはり狭いアイデンティティだったら、排他的なアイデンティティになるし。

まだ大阪の中でも、私のプログラムに参加している日本人、長く海外で家族と行って、要するに帰国子女とか、そして私の周りの国際結婚に生まれている子ども、ハーフ、ダブルとか、そして大阪、周りの私の友人の中でも、在日韓国人とか、フォースジュネレーションとか。

みんなは日本人ですけど、聞いたら、あまり日本人として認められてないし、自分の子どもでもみんな英語を書けるし、外国人として見られているので、やっぱりこういうような探究の中で、日本人のアイデンティティとしては、すごい大事な科目ですけど、いろんな日本人がいるってということも、教えることが大事じゃないかと。

また、そういう外国人、日本人の二重枠ですか、バイナリが強いので、大阪でも強いし、多分、東京でもまだかなり強いので、そういうところはぜひ、なんか、いろんな日本人が、歴史的にいろんな日本人がいるし、そして歴史的にも日本は、かなり外国人を優しく受け入れる国。これもアイデンティティとして、入れてほしいなと思っています。

この間、私、アメリカから帰った時に、隣の席に、お母さんがユダヤ人で、シリアから1934年に難民の形で日本に来て、そして、私と話したのがその息子さんと、1946年に生まれて、ずっと神戸で育てられています。

日本は本当、バーティカルソサエティと、その時代、40年代、50年代でも、戦争直後でも、すごく優しい社会です。

それを聞いたら、やはりそれも日本人のアイデンティティの中で、今から家族共生といっても、ある地域は、横浜とか神戸とか、昔から優しく外国人を受け入れる社会ですので、これもやはりぜひ、日本人のアイデンティティの中で、そういうインクルーシブなアイデンティティとして、みんなのアイデンティティ形成にしてほしいなと思っています。以上です。

(委員)

ちょっと一つを言い忘れたんですけど、多分この最後のところ、世界の中のというところから最後まで、高1と、もしかしたら高2も一緒の、こういった能力を、あなたたちが伸ばすことを期待していますよということを、最初に言って、最後にリフレクションという形で、子どもたちがそれに応えるっていう、利用のされ方だと思うんですけども。

でも、この中に先ほどから何回か出ている、自己管理能力。先ほどから話が出ているのは、休まずに授業に参加した子どもが増えたというふうに言っていますけれども、これ、自己管理能力がこの項目から抜けているので、もしそれを最初に期待するのであれば、きちんとこのルービックの中に入れ込んでいかなくちゃけないというところですね、ということだけ、一言だけ言わせてください。

(高知西高等学校)

はい、ありがとうございます。

実は、昨年度の本会におきまして、山本先生の方からご指摘をいただいております、その時の資質・能力の名称としましては、日本人としてのアイデンティティ、というふうな名前を付けておりました。

それ以降、日本人のアイデンティティが何かなということ、学校の中でも検討いたしまして、日本で住まれている外国人の方で、日本人以上に日本的なアイデンティティを持たれている方っていうのも、たくさんおいでるなというところで、日本の伝統・慣習・文化、そういった中から日本の良さっていうものを、日本人としての文化的アイデンティティだろうなというふうに捉えまして、「世界の中での日本人としての文化的アイデンティティ」というふうに、ちょっとここでの「資質・能力」の名称を、変えさせていただいているところがございます。

それで、先ほどの坪谷先生の方からの指摘なんですけれども、まさにそのとおりでして、自己管理能力が入るとしたら、リーダーシップの中に入っていかなければならないのかなというふうなところなんです。

また、調査内容を見直しというところも、一定やっていけば、図っていかなければならないなというふうなところですが、またそういったところは、課題として位置付けさせていただきます。

(座長)

はい、ありがとうございました。色々ご意見ありましたので、ぜひそういった部分を考えながら、2年目に進んでいただきたいと思います。

少し時間が迫っておりますけれども、最後に次第の3の「報告事項」、国際バカロレアの導入に向けた計画等について、ご説明をよろしく願いいたします。

3. 報告事項

国際バカロレアの導入に向けた計画等について

(事務局)

失礼いたします。時間があまりありませんので、できるだけ簡潔に述べたいと思います。

昨年の第1回のグローバル教育推進委員会の中で、委員から、MYPから取り組んではどうかというご示唆をいただきました。

その後、県教委の中で、財政当局とも色々接触をしながら、また教育委員さんにも図りながら、この度、MYP から正式にやっていくということが認められましたので、まず、そのことをご報告させていただきます。

それで、高知県としては、MYP から DP へ繋げていくバカロレアの教育を、推進していきたいというふうに、改めてここで掲げていきたいというところでございます。

今日は、平成 28 年度からの取組について、簡単にご説明をさせていただきます。

まず、前年 27 年度につきましては、こちらにおられます井上教諭に、バカロレアの担当ということで、昨年度 1 名で、孤軍奮闘していただいたんですけども、去年はまず、彼女自身がバカロレアについてしっかり理解をしていくと。

これ、新しい内容ですので、正しい知識・理解の基に、どういうふうに計画的に進めていくのかということを中心にやってまいりました。

で、今年からは、組織的に取り組んでいって、具体的な教育内容や、あるいはバカロレアの申請に向けた取組を、具体的に進めてまいりたいというふうに考えてございます。

そういう意味で、IB チーム、後ろにおります。ちょっと立ってください。

後でまた、詳しい紹介を少しさせていただきますけれども、今ここに、あともう 1 人いるんですけども、教育センターの方で今年は研究をしていただく 5 人のメンバー、こちらの方で進めさせていただきたいと思っております。

特に、教育長のご挨拶にもありましたけれども、この度、宅明教頭を新たにメンバーに迎えました。先生は、玉川大学の大学院の IB 教員の養成コースを、この春にご卒業されております。おそらく、いわゆる日本の教育の中で、IB 教育の専門にしたコースを卒業されたのは、初めてということになると思っております。

ちょっと簡単に自己紹介をお願いします。

(高知西高等学校 IB 教育推進チーム)

ただ今ご紹介にあずかりました、宅明健太と申します。この春に玉川大学の大学院で、今お話があったように、日本で最初の IB 教員、IB 研究者の養成コースを修了いたしました。

ただ、2 年、院で何か修了したからといって、すぐに実務ができるということのわけではないんですけども、IB とはいったい何を指すものなのか、その本質はいったい何なのか、毎日毎日、なんでなんでなんで、というのを考える日々であったと思っております。

この度、前にいらっしゃる坪谷様等のご推薦をいただきまして、本当に貴重な高知での縁をいただきました。今まで学んできたこと、その他、私が今まで仕事で通じて経験してきたことを高知で、最大限活かしていきたい、そういう気持ちでおります。どうぞよろしくお願いいたします。

〈 拍手 〉

(事務局)

本年度につきましては、具体的なユニットプランナーですとか、そういったところもしっかり踏み込んでいきたいと思っております。

これからの取組の概要について、説明をしていただきますが、なお、その詳しい、例えば、そういうことで、これから出てくる色々な問題点、それを克服するための、どういうふうに取り組んでいくべきかという課題等につきましては、できれば、第 2 回の時に。

もちろん、それまでも先生方にも色々と、またご助言もいただきながら、2 回目には

しっかりまとめて、また大きい方向性について、ご意見をぜひお聞かせいただきたいと考えているところがございます。

では、お願いします。

(高知西高等学校 IB 教育推進チーム)

失礼いたします。どのような体制でどんなことをしていて、今何に困っているかということ、簡単にご報告をさせていただきます。

まず、体制ですけれども、高知県教育委員会の下、高知西高校に「IB 教育推進室」という校務分掌があります。そこに今年は、音楽の担当であります主幹教諭、そして昨年まで、ALT として勤務をしていた外国人 2 人が、講師という形で入っています。そして、教諭（英語）とあるのが私です。

そして、高知県教育センターに、先ほど後ろにおりました 3 名の研究生が、国際バカロレアの研究生として置いていただくことになりました。

また、平成 26 年度から、東京学芸大学附属国際中等教育学校に、それぞれ 2 年間という形で派遣を、高知県からさせていただいております。二重丸（◎）になっている 2 人が、今年 2 年目です。つまり、29 年度は高知に帰って来る。下のポツ（・）の 2 人が、今年 1 年目です。

そして、教育センター研究生のところにも、◎の高校英語とありますけれども、先ほど後ろで起立をしておりました女性の方なんですけど、2 年間の実践を学大さんの方で積んで、帰って来てくれました。

初めてのことで、肌感覚がないまま仕事をするこの不安というのが、どうしてもあるんですけども、そうやって実践をして帰って来てくれるということが非常にありがたく、今年仕事が、随分進みが違います。

そして、私はその研究生の皆さんと一緒に、実質毎日、高知県教育センターの方に勤務をしており、時折、西高校の方に、週に 1 度くらいは帰っているというところでしょうか。管理職と連携をしながら、お話をしながら進めております。

また、学大さんの方とも、みんなで IB チームですので、それぞれの教科についてのユニットプランナーでありますとか、ミッションをもって、いついつまでにこれをお願いしますという形で、情報をシェアしながら連携をしてやっております。

そして、教頭がこの 7 月 1 日から来てくれました。

まずは、教員養成のところがとても大きいと思うんですけども、学大さんにも今後もお世話になりながら、実践的に経験を積んでいく人を、育ててくれています。

そして、公式ワークショップへの参加は、現在までのところ、MYP3 名、DP が 16 名ですけれども、本年度、さらにまた参加をする予定になっております。

そして大きいところでは、この夏 8 月に、高知市での公式ワークショップを開催することが決まり、ホームページにも出ているところです。

教科の割り振りがこんな感じになっています。また、後ほどご覧になってください。

高知での開催については、今年はまだ、MYP の理解に留まると思います。が、来年度は、各教科の公式ワークショップというものを高知で開催し、授業者としての認定証がもらえるレベルのものを考えております。

こちらがディプロマの方です。黒丸の中に白丸が二つありますけれども、これは自費でも IB を学びたいという教員がおりまして、行って参加をしてくれたり、今年もその予定が一人おります。そういう仲間が、身近にいることに心強く思っております。

公式ワークショップはこのような形で、文部科学省のサポートをいただいて、無料で実

施できるということにも、大変ありがたく思っております。

カリキュラムが非常に重要なところとなりますが、IBの各教科の要件というものを、指導の手引を見ながら、そして学習指導要領もきちんと網羅できているかということ、自分たちがきちんと読み込んで、理解をしながら進めていくということ、今一番大事にしています。

そういった意味でも、教育センターに今置いていただいていることが、非常にありがたく、各校種、教科の指導主事の皆さんにご助言もいただきながら、進めることができます。

また、中高一貫教育校がどういうふうな姿を目指すのかというところを、カリキュラムに活かさなければいけませんので、そういったことも、ご相談をしながらしております。

小中学校での学びや発達段階についても、高知大学の鹿嶋先生にご助言をいただきました。また、西高校が小中高連携事業をしておりますので、小中学校の訪問等、外国人講師と一緒にいたりしながら、生の肌感覚ということも大事にしております。

広報に関しましては、まだ中学校自体がないとか統合もまだしていないという、学校の実体がない中で進めることの難しさは確かにあります。

まずは、校内の方では、職員会の時をいただいて、IB講座というものを短時間のものを行いました。また今年も、教育センターとして物理的に離れているので、通信を教職員向けに出して、共通語を増やしていこうということをお願いしております。特にカタカナの言葉が多いので、分からない言葉がなるべく少なくなるようにということ、職場では気をつけております。

また、校外に関しては、都会とは違うエネルギーのかけ方が、やはり必要だなと思っております。グローバル＝英語教育みたいな感覚のところも、やはりまだ強いように思いますし、駅ひとつ取ってみても、外国人の方を見かけることが、都会よりは圧倒的に少ないので、そういう中で、地域の皆さんにご理解をいただくというところには、エネルギーをかけております。

一番上にあります、「高知県グローバル教育シンポジウム」というのは、昨年度開催をしたもので、多くの地域の方が来てくださり、期待の大きさを感じたところです。

そして、今日、チラシを1枚入れさせていただいております。この、ブルーのものなんですけれども。

今まで、IBの公式ワークショップにはなかったかもしれませんが、高知の場合は、地元の方に肌で分かっていたことが、まずはスタートとして大事だということで、IB0の方をお願いをしまして、地域の方対象、小学校5年生の親子80組の、模擬授業ですとかオリエンテーションを、セミナーを行うようにしています。

こういったことでも、IB0にも、それから文科省の方にも、随分柔軟に対応をいただいております。

今後に向けての課題というところですが、やはりなんと言っても、人材の育成だと思っております。宅明先生のようにIBを研究された方、実践校で経験をした方などに、お力を貸していただきたいと思うと同時に、授業者も平成29年度には、各教科、核となる教員が、つまりはユニットプランナーを自分で作成できるレベル。

どんなふうに振り返らせたらいいのかということのイメージは、やはりユニットプランナーを作れる力がないと、難しいと思っておりますので、そういったことのできる人材を来年度、揃えていかなければいけないと思っております。

あと、地元高知ならではの、という学校にやはりしていきたいですので、そのためにも、高知県で教員養成をするということも視野に入れていかないとはいけませんし、外国語、英

語が特別なものではない風土をつくるという、外国語教育も必要だと考えています。

大学さんの方には、教員養成コースの方でも、IBの教員にならなくても、今後教員になる方には、IBというものも知っていただきたいなというふうにも思います。

あと、英語以外の教科を英語で指導できる教員も、増やしていかないといけないと思いますので、学生さんにはぜひ留学の機会を与えていただき、帰って来てIB校で働くとかいうようなことも、一緒に検討できていくといいなと思っています。

あと、メディア、今日も来てくださっていますけれども、メディアさんや、それから本屋さんにもバカロレアの書籍を置いていただくようにしました。

そういうふうには、企業さんとの連携も必要ですし、ディプロマのCAS（キャス）活動などでは、社会にどうやって貢献できるかということ、子どもたちが自分の好きなことを活かしてやるというためには、やはり地元の方、企業さんなどのご協力もいただきたいです。周知できる場をつくっていきなと思っています。

そして、カリキュラムの検討も、現状と理想にやはり今、正直言ってギャップがありますけれども、現状に合わせすぎない勇気とか、プロセスの研究や計画ということが、私たちに今すごく求められているなと思います。

小中学校との連携も、非常に重要だと思います。

そして、最後に、「異文化理解」と書きました。ネイティブが今2人、講師としておりますけれども、その職業観が違うというところもありますし、契約一つとってみても、なかなか難しいところがあると思います。

そして、IBOとのやり取りを、今、ワークショップの関係でやっていますけれども、予想外の展開が起きることもありますので、私たち自身が今、多様な人たちと関わることで、すごく鍛えられているなという面があります。

そして、大きいところでは、言葉を分かりやすく伝えるということの重要性を感じています。

先だって、学大付属さんの研究会に行くと、私は体育の研究協議に入りました。何が一番、今までの体育とIBの体育、難しいかとお聞きしたら、言葉ですという意外な答えが返ってきました。

例えば、グローバルな文脈っていう、文脈ということが分からない。それを分かりやすく、一度で分かる言葉にすると他教科の先生方にも、IBって、すーっともう少し入るかもしれないっていう言葉をいただいて、ああ、確かにそうだなあと思いました。その辺りも、私たちがこれから力を入れていくところかなと思います。

たくさん、課題ばかりが最後、挙がりましたが、初めてのことに取り組めるというワクワク感、粹に感じているところも、チームみんな持って頑張っておりますので、今後とも、どうぞよろしく願いいたします。以上です。

（事務局）

こうした課題があるんですけども、最後に、高知県の県民の皆様の期待の高さとか、そういうものをちょっとご紹介しますと、この青いチラシのワークショップですけども、これ無料で、地域向けっていうことでご厚意いただいておりますが、実は今日の高知新聞のテレビ欄のところに、教育委員会の方で広告を出しております。高知の方は、おうちへ帰って新聞をご覧になってみてください。

実は、この広告を出す前に、すでに今30数件の登録があると。ですから、80組のところ、もうすでに40名近い方が申し込んでいただいています。

この広告をもって、さらに加速していくのではないかなということで、そういう意味で

地元の方の注目度も高いなということ、我々もひしひしと感じておりますので、しっかり進めてまいりますので、また色々ご指導・ご助言を、ぜひよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

〈 拍手 〉

(座長)

はい、ありがとうございました。司会の進行が十分ではなくて、もう予定の時間を超過しておりますけれども。

今の、今後、MYP、それから DP を正式にやっていくということで、昨年、坪谷委員の方から、ぜひやはり、DP というものをしていくためには、MYP セットで 6 年間を見据えて、せっかくの中高一貫校ということを活かしながらやっていく方が、というご提案をいただきました。

県教委内の中で、色々調整する中で、やっとその方向性で進めていくということが決まったという、先ほど井上教諭の方からありましたけれども、課題はたくさんありますけれども、課題があるということは、それが解決できるという部分だと思いますので、そういった意味で、高知県としても進めていきたいと思っております。

(委員)

時間が押しているのにすみません。

まずは、MYP からの開始ということで、おめでとうございます。

DP のみですと、どうしてもスコアが取れる科目を選ぶっていう、そのまま前の教育のところで、いわゆる、テストにいい点数を取るっていうことをゴール設定にするっていうことで、選んでいく生徒っていうのが、やっぱりおりますことからですね。

MYP からやっていくと、そこが先ほど言った、自分が好きなこと、自分が得意なこと、どういった窓口から貢献していきたいのかっていうところから、科目を選んでいくっていう、生徒の育成ができますので、大変すばらしいことだと思います。

ただ、ご存じのように、PYP とか MYP というのは、母国語でやることを推奨していますので、国際バカロレアはですね。

ということは、先ほど見させていただいたんですけども、せっかく学大さんに 2 年間、派遣して行った先生方が、いろんな科目の先生方がいらっしゃるのに、これはやはり、学際的にチームをつくっていただきたいというのは、私からのお願いでございます。

ちょっと見たところ、英語の先生の人数が、ちょっと偏っているのかなというところがありますので、これはちょっと誤解をされてしまいますのでね。

そうじゃなくて、学際的に主要科目の先生も入れ、なおかつ、そこには美術の先生とかも入れながら、チームをつくっていただくのが、一番いい結果になるんじゃないのかっていうところですね。

それと DP の方なんですけど、芸術はぜひこれ、美術を入れてやっていただきたいというのが、私の希望です。

あともう一つ、DP のことをこれから先考えていったときに、DP の開始と終了の時期は、高校 3 年間の間であれば、2 年間どこを取ってもいいということですので、学大さんとかの制度の真似をするのではなく、もうちょっと柔軟性を持って、生徒にとって一番やりやすい、一番、その…

どっちにしても、DP はすごく学習量が多いですから、それを考えたうえで、きちんとそ

の2年間を取れるようなスケジュール枠を、試験は11月でございますので、それを加味したうえで考えていただきたいていことですね。

あと、英語での授業なんですけれども、2科目と言われてはいますが、これは別にIBの方からのリクエストじゃないものですので、それにこだわる必要はないという方向で考えているんですけれども、あえて選ぶとしたら、第2グループの外国語と、あともう一つはEEかなと。

課題論文ですね。課題論文というのは、これは英語で書く力というのは、どちらにしても高校の間にこれ、仕上げていくっていうのは、大学に入った時も非常に、研究していくうえで、これから先は、やはり研究というのは英語で書いていこうじゃないかという、それで世界に発表しなくちゃいけないんじゃないかっていう課題もあることから、これは別にそちらのほうで時間を費やしても、決してムダにはならないっていうふうに思っているんですね。

ですから、なにも、何か一つの科目を無理やり英語で選ぶ必要は、まったくないというふうに私は思っていますし、そちらの方向性で考えていますし、文科省とも話しておりますので、それを頭に入れたうえで、計画していただければいいかなというふうに思っております。

(座長)

はい、ありがとうございました。

今後取り組むにあたっての、適格なご指示があったと思いますので、ぜひそういったことを踏まえながら、またIB推進室の皆さんは、頑張ってくださいと思います。

時間が15分ほど、当初予定した半からいうとズレておりますけれども、ご意見というか、かまいませんか。

はい、それでは、ありがとうございました。以上で予定の日程について、終了させていただきます。本日は、ありがとうございました。

では、事務局の方へお返しします。

4. 閉会

(司会)

藤中座長、会の進行をどうもありがとうございました。

それでは閉会に移らせていただきます。

閉会に当たりまして、高知県教育委員会事務局 高等学校課長、高岸憲二がご挨拶申し上げます。

(高岸 高等学校課長)

委員の皆様、本当に予定の時間を少し過ぎてまで、いろんな角度からご意見をいただきまして、本当にありがとうございます。

様々な角度からご意見をいただきまして、今後の研究・推進に活かしていきたいというふうに思っております。

高知県ならではのグローバル教育、高知県でしかできないグローバル教育を目指して、今後も研究を進めてまいりたいというふうに思っておりますので、今年度も、今後第2回、第3回とありますので、各委員の皆様からご意見をいただきながら、進めていきたいというふうに思っております。

あまり時間がございませんので、簡単ではございますが、お礼の挨拶とさせていただきます。今日お帰りになられる際には、十分お気をつけられて帰路に着いていただけたらなというふうに思っております。

今年度、第2回、第3回とこれからもどうぞよろしく願いをいたしまして、閉会にあたっての挨拶とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

(司会)

以上をもちまして、平成28年度第1回グローバル教育推進委員会を終了いたします。皆様、どうもありがとうございました。

(出席者)

どうもありがとうございました。